

# LIGHT<sub>OF</sub> LOVE

Overseas Project for the Blind - Plans and Reports

No.14 1999. 7

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人交流事業事務局



●リハビリテーションにより自立を目指す視覚障害者  
(ネパール・バラ郡でのフィールドワークにて)

# 心揺さぶられた初めての現地視察

海外盲人交流事業事務局長 竹内 恒之

田園地帯の幹線道路を走っていた我々のジープが、突然、右折した。そこから先は、とても道路といえるものではなかった。

路面は深くえぐられ、かと思えば小山のように盛り上がる。車体は激しく揺れ、ハネ上がり、落ちる。車内の取っ手を両手でしっかりと握り締めていても、その揺れから逃れることはできなかった。幅約15mの川にさしかかったが、あるべきはずの橋はなかった。流されたか、落ちたのであろう。ジープは大きく迂回し、慎重に川を渡った。

もとの荒れた道路に戻り、小さな林を抜けた瞬間、いきなり集落が現れた。我々が支援しているCBR（地域基盤型リハビリテーション）の実施地区・バラ郡の小さな集落であった。周囲には田園と畑が広がる。

今回のネパール訪問は、当協会が同国で14年来実施している海外盲人援護事業の一環の統合教育とCBRの進捗状況視察が目的であった。予定では、統合教育校3校とCBR実施の1地区を回る総走行距離1300Kmにおよぶ旅である。

約20軒ほどであったろうか、小さな家がひっそりと寄り添うように建ち並んでいた。ほとんどの家が、草ぶきの屋根。竹を組み、笹の葉を編み込み、それに黄土色の壁土を無造作に塗りつけただけの造りであった。首都カトマンズからルンビニ県経由で南へ約620Km、インド国境まで車で30分ほどの地点である。

間もなく雨季を迎えるネパールの今、5月下旬は、1年で最も暑い時期であった。特にこの地区の日中は軽く40度を超える。とにかく暑い。説明のしようもないほど暑い。家並みを縫う路地は、水牛のフンだらけであった。異臭が凄い。強烈な暑さが、その異臭を増幅させる。風もない。

その女性は、自分の家の横の狭い空き地で作業をしていた。民族衣装をまとい、懸命に機械の大きな円形ハンドルを両手で回していた。ハダシであった。ハンドルが一回転するたびに、細かく切

られた干し草がパサッ、パサッと乾いた音を立てて彼女の足元に落ちる。水牛の餌用の干し草切りをしていたのだ。CBRによる自立した盲女性だ。彼女の家は長屋を二間に仕切っており、この地区では比較的大きな家だった。屋根こそ草ぶきであったが、外壁は白塗りのレンガ造り。彼女の部屋には今にも崩れ落ちそうな木製の粗末な大型ベッドと扇風機が1台。この暑さだというのに動いていない。マットもなく、ゴザのような物が敷いてあるだけのベッドには子供が一人寝ていた。

“そよ”、と風が揺らいだ。吹くほどでもなく、頬をかすめるほどでもない。が、それだけの揺らぎで、体に涼感がわいた。40度の炎天にはこれだけでも十分だった。

「モミナ こっちへ」

我々に同行して来たマダブ・ゴータムCBRセンター所長の呼びかけに一瞬ビクッとしたが、手を休め、近くに立て掛けてあった長く、太い、竹製の白杖を持ち、無言でやって来た。

モミナ・セキさん。23歳。独身。事故のため5歳で失明した。

ゴータム所長の説明によると、モミナさん一家は15人家族。母親と兄2人に妹4人の他、甥が5人に姪が2人、だそうだ。一家で農業を営み、年1万ルピー（約2万円）を得ている。モミナさん自身は1度も学校教育を受けたことはない。



●家族と協力して干し草切りをするモミナさん（左）

モミナさんはこれまで、自立のためにCBRから1回1万ルピー（約2万円）の水牛購入費融資（無利子）を3回受けた。1頭は売ってしまったが、2頭は農作業で使っているそうだ。だから住環境が劣悪に見えたとしても、ここでは恵まれた生活環境にあるといえるのかもしれない。

結婚もしたい、子供も欲しい、そうだ。CBRスタッフが説明している間中、モミナさんは胸元の高さで白杖を両手で握り、黙ったまま立ちつくしていた。白杖を握る指は太く、荒れていた。

別れ際、ただ一言「ナマステ（さようなら）」と小さくつぶやき、両の手のひらを合わせたのが印象的だった。

ここで目にしたケースは、CBRでも成功した例であり、恵まれたものであったのかもしれない。だが、それにしてもあまりにも…、の感はぬぐえなかった。

ところで、CBRスタッフによって運営されている眼科診療をみることができた。

パラ地区のCBRセンター1階眼科診療室。約10畳ほどの部屋の壁際に長イスが並べられ、子供を抱く3人を含め11人の患者が待つ。どの顔にも脅えがうかがえる。中央の大きな机に眼科診療助手と事務員が座り助手が大声で名前を呼ぶ。丸イスに座った患者の目に素早く懐中電灯の光が当てられ、ひと言、ふた言。その場でクスリが渡され、それで終了、というケースがほとんどだ。それ以上の場合でも、眼底鏡による検査程度であった。

生後3カ月という乳児が祖母に抱かれてやって来た。目をケガで痛めたのだというが、あまりにも痛々しい。同じく光を当てられ、祖母が点眼薬の差し方を繰り返し教えられた。

治療費は一律5ルピー（10円）だという。しかしその工面、並大抵のことではなかっただろう。

実にあっけないほどの診療であったが、ネパールの盲人の失明原因の60%が白内障であると聞くと、大きな予防ならびに治療効果があるに違いない。事実、あるCBR幹部は、CBRによる白内障手術で、多くの人々が視力を取り戻すことができた、と胸を張った。

いずれにしろ、CBRの現場で見た事実は、極めて生々しいものだった。

ならば、CBRと盲教育と、どちらを優先させ



●祖母に抱かれた乳児を診察するバラCBR眼科助手

るべきもののなか。ネパール盲人福祉協会（NABW）の幹部は、言下にこう言い切った。

「間違いなくCBRです。CBRによって、盲人の生活を飛躍的に発展させることができるからです。確かに、統合教育校ができれば、1校で20人の盲児童への教育が可能になります。しかし、その経費をCBRにつき込めば、500人の盲人の経済的自立を実現させ、その生活の向上を図ることができるのです」

20人对500人。CBRがどうしてそこまでの強力な武器になりうるのか。

「CBRは、盲人が自立し、自分で稼ぐことができるようにするリハビリテーションをしているからです。ネパールの盲人は他の国の盲人と違い、農業的な仕事が十分にできます。例えば野菜作りや水田での草取り、あるいは水牛の飼育など、生活的には晴眼者と同じことができるのです。だからこそ、そうした仕事を習得させることが可能なCBRが重要なわけです。CBRはネパールの盲人の自立にとって、非常に有効な手段なのです。ですから我々はCBRに力を入れるのです」

「もう一つ。我々は何かの事業をしたいという盲人に対し、1事業1万ルピーの助成金を出しています。いわばガンバレ料ともいえるものですが、これによって盲人はいろいろな事業をしています。素晴らしいことだと思いませんか。自分自身で稼ぎ、家族をサポートできるのですから」

語る口調は熱っぽい。とにかく盲人を自立させる、自分の金は自分で稼がせる、そのための支援がCBRであり、それこそが最良の方法なのだと強調するのだった。そして、だからこそ、だからこそ経済支援をと、続けた。

しかしその一方で、盲児に対する統合教育関係者は教育環境の不備を訴え、その改善への支援を求める。

我々が訪ねたのはルンビニ県のシャンティ統合教育校、ロータート郡のジュダ統合教育校、バラ郡のドゥマルワナ統合教育校の3校。

どの学校も校庭だけはビッシリと生えた青草で美しかったが、校舎となると、言葉を失う。2階建はシャンティ校のみ。いずれもコンクリートに白いペンキを塗ってはいるが、それとて汚れ、削られ、あたかも廃屋ビルを思わせる雰囲気だった。教室には木製の長机と長イスが並べられていた。ロッカーも本棚も何も無い。ただ黒板、教師用の立ち机に生徒用の机とイスがあるだけで、ほとんどの教室には電灯もなかった。そしてなぜか、どの窓にもガッシリとした鉄格子がはめられていた。3校とも公立であるため、全員が制服姿だった。女子は淡いブルーのブラウスに紺のスカート、首に同じく紺のスカーフを巻く。男子は同色の組み合わせでYシャツと長ズボン。清々しくかわいらしい。校長を始め全教師がサンダル履きだから、生徒も当然サンダルだ。我々が教室に入ると、誰の指示もなしに一斉に起立をし、胸の前で両手を合わせ、挨拶をしてくれた。

各校の状況は、次のようなものだった。

#### <シャンティ校>

全校生徒数 800人　うち盲学生17人（男10 女7）

統合教育担当教師 3人

#### <ジュダ校>

全校生徒数 1500人　うち盲学生16人（男10 女6）

統合教育担当教師 4人

#### <ドゥマルワナ校>

全校生徒数 1200人　うち盲学生20人（男14 女6）

統合教育専任教師 3人

各校とも小・中・高校課程まであり、1年から10年、1年から12年までの生徒が一つの校舎の中で一緒に学んでいる。しかも、ある学校では、一つの教室で4・6・7・9年生が合同で授業を受けていた。盲学生も例外ではなく4年生の男女盲学生がその中にいた。

また別の学校では、8年生の晴眼女生徒が9年生の盲女生徒にテキストを読み上げ、サポートをしていた。高学年盲学生用教材の点字化が難しく、

音読しているのだという。盲女学生は、懸命に点筆を動かしメモをとる。その傍らでは、低学年の盲児2人が両手を机に投げ出し、突っ伏すようにして寝ていた。机の上には何も無い。日本の教育概念は全く通用しない教育環境と教育現場だ。

盲学生は、全員が寄宿舎生活である。単独通学などとても不可能な交通環境と道路事情であるから、これまた当然のことであろう。



●盲児に歓迎の花輪をかけてもらう竹内

そのために当協会は、郵政省の国際ボランティア預金からの助成を受け、これら統合教育校の寄宿舎整備を進めている。訪ねた3校のうち、ドゥマルワナ校はすでに建設済みで使用中だが、ジュダ校は現在建設中で6月に竣工、シャンティ校は来年建設の予定だ。だが、ジュダ校とシャンティ校で見た現在使用中の寄宿舎は、正直に言って、あまりといえばあまり、といえるひどさだった。両校の寄宿舎とも男子部屋と女子部屋の区別はあるものの、コンクリートむきだしの室内にあるのは、ベッドのみ。ロッカー、私物入れ箱、棚といったものすら見当たらなかった。

「雨漏りがひどく、雨のたびにシーツを交換しなければならぬ」と嘆くジュダ校。

シャンティ校は、約10畳と6畳ほどの2室があったが、寄宿生17名に対し、ベッドは9つしかなかった。数が合わない。2人で1ベッドを共用させざるを得ない、とのことだった。授業中で無人の室内に無造作に立て掛けられた数本の白杖が切なさをつのらせた。ジュダ校はあと1カ月、シャンティ校は来年中に新寄宿舎が完成とはいえ、現状はとても生活ができる部屋とは思えなかった。

そしてすでに建設を終え、比較的に良好な運営が行われていたドゥマルワナ校でさえ、新たな問



題がおきていた。部屋数が不足してきたのだという。男子14名、女子6名の寄宿生に対し、男子部屋と女子部屋が各1室。男子部屋がすでに満杯で、低学年の男子生徒を女子の部屋で寝かせているのだそうだ。だが男子生徒の体が大きくなり、この緊急措置もう限界にきている。

「どうしてもあと2部屋は必要なのです。おまけにこの地区には、70人もの未就学盲児童がいます。現状ではとても受け入れられません。2部屋の建設費は30万ルピー（約60万円）です。私達は30万ルピーがなんとしても欲しい」

### 事務局長交代のお知らせ 事務局的名称も変更

本年4月1日付けの、当事務局における人事異動により、事務局長がこれまでの井口淳から竹内恒之に変わりました。

新事務局長となった竹内は昭和17年生まれ。早稲田大学卒業後、昭和40年に毎日新聞社に入社。社会部、サンデー毎日編集部、点字毎日編集長などを経て、この3月に退社。4月から当協会勤務となりました。なお、事務局創設以来17年間にわたり、指揮をとってきた井口は、海外事業担当理事として、引き続き事業の推進にあたります。

また、事務局の名称もこれまでの「海外盲人援護事業事務局」から「海外盲人交流事業事務局」へ変更となりました。その名称にありますように、今後は事業を通して、現地の人との交流にも力を入れていきたいと考えています。

新体制の下で行われている本事業に、変わらぬご支援・ご指導を賜りますことを心よりお願い申し上げます。



●事務局にて撮影（右が竹内）

日本円で60万円。それで2部屋が建つ。60万円が高いか安いかわからない。なんとも重い響きの60万円という訴えであった。

盲学生の卒後の職業は、うまくいっても学校の教師だけだという。教育支援に重点か、あるいはCBR支援に重点か、その判断は安易には下せない。しかし、支援と協力を求める切実なまでの叫びには、辛すぎるものがあつた。

赤い花をつらねた手作りの花輪を首にかけてくれ、両手でしっかりと握手をしてくれた盲児童達の手のぬくもりと微笑みが思い出されてならない。

### 笹川平和財団の支援で点字教科書製作 塩化ビニール板を輸送

当事務局は、笹川平和財団の「国際平和輸送サービス支援」事業の助成を受け、昨年12月10日に塩化ビニール板1万枚をネパールの首都カトマンズにあるネパール盲人福祉協会（NAWB）へ輸送しました。



●塩化ビニール板に点字を打つNAWBスタッフ

この塩化ビニール板は、NAWB点字出版所で製作される点字教科書の原版として使用されるもので、製作に欠かすことのできない大切なものです。ネパール国内では、代わりとなる適当な資材を調達できないため、これまで同財団の支援を受け、日本から塩化ビニール板を輸送していました。その在庫が不足してきたため、今回、緊急に補充することとなりました。

この補充により、今後最低5年間にわたる点字教科書の製作が可能となり、引き続き、ネパール全土の就学視覚障害児一人一人に点字教科書が行き渡ります。彼らには、点字教科書がボロボロになるまで、勉学に励んでもらいたいものです。

## ついに完成 ジュダ校新寄宿舎

長年の懸案によりやくピリオド。

私たちがネパールにおいて支援している視覚障害児教育実施校の一つ、ロータート郡ゴール町のジュダ校で昨秋から建設が進められていた新寄宿舎が今年6月末、めでたく完成の日を迎えました。7月17日には落成式も取り行われました。

建設はその初っ端からハプニングに見舞われました。着手まで秒読み段階に入っていた昨年9月に降った豪雨で、建設敷地が水に浸かってしまったのです。実際の着手は10月下旬となりました。出だしのつまずきに行く末が案じられましたが、いざ建設が始まると、遅れを取り戻すかのような急ピッチで作業は進みました。普段のんびりしていても、やる時はやるようです。

もう一つのハプニングは、完成が目前となった今年5月に実施されたネパールの総選挙です。同校は投票箱設置所となったため、1カ月程の間、閉鎖され、建設工事も中断を余儀なくされました。この中断がなければ、5月末の私たちの訪問時に合わせ、落成式が行われていたことでしょう。

その他、トイレ・シャワー室の設置場所をめぐる、設計技師とNAWB側で意見が分かれるといったこともありましたが、建設は概ね順調に推移したと言えるでしょう。

### 生活環境の大きな改善

ロータート郡はタライ平野南部のインドとの国境近くに位置しています。雨季前の4月～5月は40度を軽く超える猛暑が続き、雨季に入れば度々洪水の被害を受けます。その苛酷な気象状況の下、視覚障害児が生活していた旧寄宿舎は元々は倉庫として使用されていたもので、構造的に欠陥だらけ。熱を吸収しやすい垂鉛のトタン屋根、2メートル強の高さしかない天井、壁に穴を開けただけの窓。部屋は常に暗く、風通しも悪く、夏は蒸し風呂状態。とても生活環境に値するものではなく、健康を害する児童も少なくありませんでした。

学校関係者とは、かなり前から新寄宿舎建設に向けた協議を重ねてきましたが、予算の関係もあり、なかなか実現に至りませんでした。ようやく建設にこぎつけたのは、国際ボランティア貯金の

配分金により、建設資金の目処がついたからです。

新寄宿舎の男女の各部屋は旧寄宿舎に比べ広く、ガラス窓設置により室内は格段に明るく、風通しも良くなりました。大雨による浸水に備えるため、土台部を地面から1メートル程の高さにしましたが、その分だけ、地表からの放射熱を避けることができるようになりました。



●完成を目前に迎えた新寄宿舎（5月撮影）

旧寄宿舎にはなかったトイレ・シャワー室は、男女の各部屋に接した場所に一つずつ設けられました。これまでは、寄宿舎を出て、かなりの距離を歩かなければならず、不便さと安全性が問題とされていました。また、宿直する用務員の部屋が設けられたことで、緊急の事態にも対処しやすくなり、警備の強化にもつながりました。

屋上に上がれば、開放感を楽しめますし、将来、寄宿舎周囲に塀がめぐらされれば、より安全な遊び場もできます。このように、さまざまな面で生活環境の大きな改善がもたらされました。

ジュダ校はネパールで4番目に誕生した学校で、60年以上の歴史がある伝統校です。一方で、同校の視覚障害児教育は1994年に始まったばかり。平屋造りで横に大きく広がる校舎は、歴史を刻んだ風格を醸し出していますが、新寄宿舎のモダンな外観は伝統に新たな歴史が加わったことを象徴しているかのようです。

生徒、学校関係者、その他大勢が待ち望んだ新寄宿舎の完成。これが大きな契機となり、同校の視覚障害児教育が着実に発展し、伝統を築き上げていくことを期待しています。

## 研究テーマは国際協力

### 東海市立平洲中学校

今年5月12日(水)、愛知県の東海市立平洲(ヘイシュ)中学校3年2組の生徒さん8名が、修学旅行における研修学習の一環として、当協会を訪問しました。生徒さんは最初に、点字本の製作工程を一通り見学した後、海外事業に関する説明を受けました。国際協力を研究テーマに据え、こちらから送付した資料を基に事前学習を進めていたとのことで、あらかじめ用意された質問事項も大変しっかりしたものでした。先日、生徒さんからお礼の手紙を受け取りましたので、ここに御紹介します。

先日はお忙しい中、いろいろとありがとうございました。点字本を製作する際には、たくさんの工程があることや、苦労があることがよく分かりました。そして、点字には2種類の作り方があることを初めて知りました。アルミ板にくぼみをつけて、紙におしつけて1行1行交互に空けるやり方は、なんとなくは知っていましたが、インクの方のやり方は全く知りませんでした。インクの方は両面にぎっしり点字ができるため、とても無駄なく情報がたくさん入るので、とても良い方法だと思いましたが、それにもまた短所があることも知りました。

ネパールで、いろいろと点字の技術を教えてあげたり、幼い子供たちに点字の読み方を教える訓練をしたりなど、ネパールでヘレンケラー協会の方がやるのではなく、現地の人に教えてそこから広めていくというのは、すごいなあと思いました。

また、ネパールの方に視覚障害のある方が多いのは栄養が足りないからであって、そのために栄養剤を送ることなどもしていることを知って驚きました。



●点字本製作の製版作業を見学



●海外事業事務局スタッフの説明を受ける

さて、点字本を読むには指先の神経がとても敏感でなければならないそうです。しかし、説明されたことは、それ以上すごいことでした。指も神経がマヒしてしまったら、口で読むということを知り、とてもビックリしましたが、さらに「口の神経がなくなったらどうする」と質問されて、私たちはとても悩んでしまいました。そして、舌で読む「舌読(ゼツドク)」があることを教えてくれた時は、「本当に？」と思ってしまいました。しかし資料で舌読していたのを見て、すごいなあと感じました。それに舌で何回も読むと口の中が切れ、血だらけになり、その本も血だらけになってしまうと聞いて、すごく人は本などを読みたいんだと思いました。私たちは簡単に本を買い、すぐ本を読める。それはごくごく普通のことなのに、とても幸せなことだと実感することができました。

これを機に町で盲人の方を見かけたら、声をかけ、助けてほしいなら助けてあげたいし、その方の望みなどをいっぱいかなえてあげたいです。

東海市立平洲中学校

3年2組3班一同

## ネパール・スタディーツアー



●早朝のサランコットにて

## 豊かな自然と現地交流に満足

本吉 寿一

(千葉県 67歳 全盲)

私達障害者8名は、介添の方々と共に、去る平成10年11月29日～12月6日までの8日間の日程でネパールを訪れました。

釈迦の生誕地ルンビニでは、アショカ王の石柱、古い僧院跡、沐浴場等を見学しました。その折、世界仏教サミットが翌日から開催されるということで、ネパール王国の首相一行が来られ間近に拝見でき大変感動しました。

バイラワ・バザール見学では、二人乗りのリキシャのパレードをし、沿道の人々が、興味深気に振り返って見ているようで得意満面。

翌日はネパールの視力障害者の学ぶ「シャンティ統合教育校」を訪れました。ヘレンケラー協会が視力障害者が充実した教育を受けられるようにと、長年に亘り支援している学校です。そこでは、香り高い花のレイを首にかけていただき、校長先生のウエルカム・スピーチ。生徒のみなさんから、楽器を使っの素晴らしい歌や踊りでの歓迎。私達からは、自己紹介や挨拶を通して、生徒達が立派な国際社会人となるために点字を通して学ぶように励ましてきました。校舎の横には、ベッドを備えた寄宿舎があり、必ずしも充分とは言えないが、寮母さんを中心に生活している様子が伺えて安心しました。

学校訪問を終えて、チトワン国立公園へ。ボートにてナラヤニ河を渡り、静かな水面に遊ぶ鳥。岸辺にじっとしているクロコダイル。枝から枝へ戯れるモンキー等の説明を聞き、エキゾチックな

日本の視覚障害者が海外の視覚障害者福祉・教育を目的に当協会が実施しているスタディーツアー。で企画され、昨年11月末のネパール・スタディーツアーと短めでしたが、多彩なネパールの魅力を余すと早朝からのトレッキングや、楽器演奏や踊りで夜に参加者の疲労が心配されましたが、皆さん元気そツアーに参加された本吉さんと西原さんから感想

自然を脳裡に描きながらジュングルロッジに到着。ロッジの夜はランプでの生活。外から聞き慣れない不気味な鳴き声等でやや不安な一夜を過ごす。夜が明けて、象に乗ってジャングル探検。無数の小鳥の鳴き声や象の足音を聞くうちにいつしか野生動物の観察に夢中になっている。昨夜の不安は嘘のよう。真近かに出会ったサイの鼻息にはびっくり。自然を満喫した一日でした。

ポカラでは、サランコットへのトレッキング。白く連なるアンナプルナ連峰に昇る朝日が映えて、うす桃色からやがて茜色へと変化していく様子を周囲の喚声や説明からその美しい情景を想像し感動しました。

最後の訪問は、ネパール盲人福祉協会（NAWB）でした。点字出版所を見学し、印刷・出版の様子や盲人たちの現況が話され、日本の点字出版の実情、ネパール訪問の印象等を話し、お互いに交流してきました。夜はヒマラヤンホリデーズのガーデンパーティに参加し、現地の方やNAWBの人達と共に、ファイヤーを中心に歌(Resham



●盲児から太鼓の手ほどきを受ける本吉さん



# イツアーの思い出

現場を訪問し、そこで現地の人との交流を図ること  
年12月に初めて実施した後、ほぼ年に1度のペース  
で10回を数えるに至りました。今回、日程は8日間  
なく体験していただくため、スケジュールは満載。  
まで盛り上がったパーティなどが連日のように続き、  
の。参加者全員が無事帰国することができました。  
いただきましたので、ここに御紹介します。

Firiri)や踊りで盛り上がり、楽しいひとときを過  
ごしました。

こうして、天候や仲間にも恵まれ、最高のネパ  
ールの旅を終えることができました。これも、協  
の皆様をはじめ、ボランティアの方々、現地の  
ヒマラヤンホリデーズのみなさんのご援助による  
ものと深く感謝申し上げます。

## もう一度行ってみたいネパール

西原 清松

(東京都 56歳 全盲)

私は東京ヘレンケラー協会が企画しました「ネ  
パールスタディツアー」に初めて参加しました。  
関西空港からロイヤルネパール航空RA-412便に  
乗り、途中、中国上海空港にて給油し、カトマン  
ドゥ空港に着いたのは午後の7時ごろだったと思  
います。「寒暖の差が激しいので気を付けるよう  
に」と言われていたので若干心配なところもあり  
ましたが、思ったほど寒さを感じなく、楽しい旅  
行ができました。

カトマンドゥ空港で降り、ホテル行きのバスに  
乗り込もうとした瞬間、物乞いをする子供達に取り  
囲まれたことに思わずびっくりしてしまいました。  
経済的には貧しい国と聞いておりましたが、  
「ナマステ」という言葉にどことなく心の広さと  
暖かみを感じました。ネパールはヒンドゥー教が  
国教ということであちらこちらにお寺があり、信  
仰心の厚いことを物語っているように感じました。

ルンビニでは釈迦の沐浴場、アショカ王の石柱、  
ベット寺、マヤー聖堂などなど珍しいものを見  
ることができ、機会があれば、もう1度参加した



●象の体に触れる西原さん（チトワン国立公園にて）

いと思いました。

国立公園の中にあったレンガの建物は2600年前  
のレンガということを開き、改めて驚いてしま  
いました。

その他、西ヒマラヤ連峰を間近に望めるネパ  
ールの景勝地ポカラ、そしてチトワン国立公園での  
象のサファリなど、ネパールならではの自然を満  
喫することができたことも印象に残りました。

12月1日に訪問したシャンティ統合教育校で  
盲児童や先生方と交流ができたことも印象に残り  
ました。向こうの民族舞踊や歌に触れ、自分たち  
の文化を大事にしていることを物語っているよう  
に思いました。

## ネパールツアー旅程表

|           |                                                     |
|-----------|-----------------------------------------------------|
| 1998年     |                                                     |
| 11月29日（日） | 関西13:00発(RA412)→カトマンズ18:45着                         |
| 30日（月）    | 空路、バイラワへ<br>到着後、ルンビニ観光                              |
| 12月1日（火）  | シャンティ統合教育校訪問<br>専用バスでチトワン国立公園へ                      |
| 2日（水）     | チトワン国立公園で象のサファリと川下り<br>専用バスでポカラへ<br>夕食はベグナス湖でバーベキュー |
| 3日（木）     | サランコットからアンナプルナ連峰を眺望<br>空路、カトマンズへ<br>空路、カトマンズへ       |
| 4日（金）     | バタン市、バクタブル市を観光<br>夜はガーデンパーティー                       |
| 5日（土）     | カトマンズ市内観光                                           |
| 6日（日）     | カトマンズ0:05発(RA411)→関西11:40着                          |

## 現地から届いた手紙

私はバラ眼科診療所が開設されたとき初めて、バラCBRセンターに足を運びました。それまではバラCBRの活動について何も知りませんでした。バラ眼科診療所のサービスはとてありがたく、私はよくここを利用させていただいています。

かつて、私たちは眼病に罹ると、薬局に行き、薦められた薬を疑うことなく服用しました。それらの多くは医者の方箋のない薬でした。また、地元で採れる薬草だけで眼病を直そうとする者もいました。不適切な治療により、多くの人が慢性的な症状に陥り、中には失明する者も現れました。

現在、日本の皆様の温かい支援を受け、私たちは自分たちの住むバラ郡で治療を受けられるようになりました。診療の後、薬も無料でいただいています。時々、医者や眼科助手がさまざまな村や学校を巡回して診療してくれます。

もし、バラ眼科診療所に小規模でも手術のできる設備があれば、さらに素晴らしいこととなるのは間違いありません。簡単な手術のために他郡まで出向く必要がなくなれば、貧しい患者にとって大変な恩恵となることでしょう。

私たちに与えられた素晴らしい支援について、いつも神に感謝の祈りを捧げています。

バラ郡ダルマナガル村

Mr. Mohan Prasad Yadav

私の妹コシーラは生まれたときは、視力がありました。彼女は2歳のとき、高熱に冒され、その影響が彼女の目に及びました。治療には薬草が効果あると、私の両親に勧める者がいました。その言葉のみを信じ、他の治療を施さなかったことが、彼女が完全に失明した原因だと思っています。

彼女が失明したとき、私たち家族は狼狽しました。そして彼女の将来について頭を抱えました。同時に彼女を負担にさえ感じ始めました。

そんなとき、バラCBRのスタッフから、東京ヘレン・ケラー協会が視覚障害児のために寄宿舎を備えた学校の運営を支援していることを聞きました。その素晴らしい知らせに、私たちは大変喜びました。バラCBRの協力を受け、妹はドウマ

ルワナ統合教育校に入学することができました。

妹は現在7学年に在籍しています。私は妹の後見人として、またドウマルワナ統合教育校で学んでいる視覚障害児に代わり、衣食住や教育を受ける機会を提供して下さった東京ヘレン・ケラー協会及び日本の皆様に心から感謝申し上げます。

バラ郡ドウマルワナ村

Mr. Fun Bahadur Sarki



●歌と踊りが得意なコシーラさんは成績も優秀

このドウマルワナ統合教育校の寄宿舎での生活がとても気に入っています。ずっと自分の育った村に残っていたら、勉強する機会は一生来なかったことでしょう。

東京ヘレン・ケラー協会は衣食住をはじめ、生活および学習に必要な物を提供してくれています。私にとって何よりも大きいのは、ここで一日一日新しいことに出会い、新しいことを学んでいけることです。

東京ヘレン・ケラー協会の温かいご支援に、心から感謝申し上げます。

ドウマルワナ統合教育校7年

Miss Koshila Kumari Sarki

ドウマルワナ統合教育校の統合教育担当教師として、東京ヘレン・ケラー協会がネパールのような発展途上国で視覚障害児のために寄宿舎施設を備えた学校の運営を支援してくださっていることに、心からの感謝の言葉を述べさせていただきます。そのような人道的で献身的な活動はとても素

素晴らしいものだと感じています。東京ヘレン・ケラー協会が将来にわたっても、視覚障害者のために取り組まれることを期待して止みません。

重ねて、感謝の念を表します。

ドゥマルワナ統合教育校教師

Mr. Roh it Chaudhary

東京ヘレン・ケラー協会が私たちのために素晴らしい支援活動を展開していることに、心から感謝申し上げます。

私たちネパールの貧しい障害者は、東京ヘレン・ケラー協会とネパール盲人福祉協会が共同で展開している事業が素晴らしい成果を上げていること、また私たちに教育を受ける機会や衣食住をはじめとする日常生活に必要なものを提供していただいていることを、本当にありがたく思っております。

東京ヘレン・ケラー協会は私たちのようなとても貧しい障害者に教育の扉を開いてくれました。温かい支援により、私たちは目が見えませんが、心の中でいろいろな物事を見ることができるようになりました。私たちのような視覚障害者が教育を受けられるのは、東京ヘレン・ケラー協会の尽力のおかげです。

私たちはとても幸せです。本当に感謝しております。

ジャンティ統合教育校 9年

Miss Kunti Poudel



●カンティさんは来年、高校卒業認定試験を受ける

東京ヘレン・ケラー協会の温かいご支援とネパール盲人福祉協会の精力的な取り組みの下、このアマル・ジョティ・ジャンタ校で、視覚障害者のための統合教育がおこなわれています。それは、視覚障害者やその家族には大変画期的なことです。

ここで学んでいる視覚障害児は点字教科書を使用して、勉強しています。ここの視覚障害児全員の将来が必ずや明るいものになることを私たちは確信しております。

東京ヘレン・ケラー協会が、この恵まれない地域の視覚障害児のために、非常に尊い支援を提供してくださっていることに心から感謝の念を表します。

ジャンタ統合教育校教師

Mr. Dhurba Kumar Shrestha

## 音読公演「ガラスのうさぎ」

現役のアナウンサーによる朗読と音楽で物語をつづる「音読公演」。制作者側の美しく正しい日本語へのこだわりと視覚障害者にも舞台を楽しんでもらいたいという気持ちが形となって実現したものです。その4回目となる公演が、昨年12月4、5日の両日、東京・千代田区の「TOKYO FMホール」でおこなわれました。

12月8日の太平洋戦争開戦の日になみ、戦争をテーマにした今回は、高木敏子さん作のロングセラー「ガラスのうさぎ」を取り上げました。熱の入った朗読に、臨場感あふれる効果音、弦楽4重奏の生演奏がうまく溶け込み、観客はそれぞれの想いを胸に、静かに舞台に見入っていました。

製作の(株)アワーズより収益の一部が、当協会のネパールでの視覚障害者支援事業に寄付されました。



## *AID PROJECT IN NEPAL FISCAL 1998* (1/4/1998 - 31/3/1999)

### BARA CBR PROJECT

In July, 1998, Bara CBR (Community-Based Rehabilitation) Project which has been proceeding in whole Bara district of Narayani Zone, with a constant effort of NAWB (Nepal Association for the Welfare of the Blind) and THKA (Tokyo Helen Keller Association), entered upon the 10th year, entering follow-up stage. However, many villagers still have been identified as blind and visually impaired (BVI) persons in the area for the main reason that their living standard has not been improved and stayed low. Bara CBR Staff visited the houses of BVI persons and provided them with rehabilitation ranging from counseling to vocational training. For clients hoping to be economically self-reliant, Bara CBR has provided loan so that they can engage in a job such as breeding of livestock. Also, for clients who have already gone through a series of training, Bara CBR has followed them up.

### BRAILLE BOOK PRODUCTION

NAWB Braille Printing House produced and distributed braille textbooks to 420 blind students of 33 integrated education schools in Nepal including 1 blind school. They also produced and distributed braille calendar and monthly braille magazines to integrated education schools and relevant facilities.

### INTEGRATED EDUCATION PROGRAM

NAWB and THKA have supported Integrated Education for blind students of 3 schools in Bara District and other three schools in Rautahat District, Gorkha District, and Rupandehi District respectively. In Duddha School in Rautahat District, hostel construction has been launched to replace old hostel, since old hostel has a bad influence on the health condition of blind students due to its structural defect. And teacher training was held in NAWB Central Office to give resource teachers the expertise of Integrated Education such as braille code and special recreation.

### PRIMARY EYE CARE AND EYE CLINIC

At Bara Eye Clinic in Bara CBR Center, 7,214 patients received treatment to cure eye diseases. Patients who were found necessary to have an operation to prevent blindness were referred to eye hospitals in other districts or eye camps. Bara Eye Clinic has contributed a lot to prevention of blindness in Bara District, where there are no eye hospital and no other clinic.

Primary Eye Care Workshop was held in Bara CBR Center to give local persons knowledge about prevention of blindness and symptoms of eye diseases.

Itinerant checkup and lecture was held in 2 schools and 2 villages in Bara District to cure eye diseases of students and local persons and spread the knowledge of nutrition and hygiene.

### BRAILLE TECHNICAL GUIDANCE

THKA sent its technical staff to NAWB and provided technical guidance in the printing house to enhance the skill of NAWB staff's producing braille textbooks.

### VINYL CHLORIDE PLATE

With the aid of "SASAKAWA PEACE FOUNDATION, JAPAN", 10,000 sheets of Vinyl Chloride Plates used as original plates of braille textbooks were transported to NAWB.

### PUBLIC RELATIONS, EVENT, AND FUND-RAISING CAMPAIGN

To publicize this project and raise fund for it, THKA issued its own newsletter "LIGHT OF LOVE" in September, 1998.

To publicize this project, we participated in "International Cooperation Festival" at Hibiya Park. (October 3rd and 4th, 1998)

To aim for exchange of blind persons between Japan and Nepal, THKA organized a tour designed for blind persons in Japan. (November 29th to December 6th, 1998)

THKA backed up a reading performance, sales of which in part were donated to our project. (December 4th and 5th, 1998)



## 1998年度事業報告(1998年4月1日ー1999年3月31日)

## 1. 視覚障害者リハビリテーション(CBR)事業

ナラヤニ県バラ郡全域で展開している本事業は昨年7月に10年目に入り、フォローアップ段階へと移行した。しかし、住民の多くが貧しく、衛生状態も悪い同郡の状況に大きな変化はなく、視覚障害者の発見は未だに後をたたない。そのため、本年度もバラCBRスタッフが、同郡に居住する視覚障害者321名の家庭を訪問し、在宅リハビリテーションを実施した。内容は、視覚障害者一人一人の状況に応じて、更生相談から歩行・日常生活技能訓練、職業訓練まで広範囲に及んだ。

また、経済自立を目指す視覚障害者には資金を貸与し、家畜の飼育や縄綱作りなどに従事する機会を与えた。既に一通りの訓練を終了した視覚障害者に対しても、適宜、経過観察のフォローアップがおこなわれた。

## 2. ネパールにおける点字出版事業

ネパール盲人福祉協会(NAWB)点字出版所にて、初等～高等教育課程の点字教科書2,904冊が製作され、ネパール全土の統合教育校33校(盲学校1校を含む)に就学している約420名の盲児童を対象に配布された。また、点字カレンダー500部が製作され、統合教育校や関連施設に配布された。その他、視覚障害者個人や団体を対象にした点字月刊誌も製作・配布された。

## 3. 統合教育事業

- ①バラ郡の統合教育校3校(盲児童25名)にて、引き続き統合教育運営を支援した。また、ロータート(盲児童16名)、ルバンディビ(盲児童17名)、ゴルカ(盲児童15名)の各郡の拠点統合教育校においても同様の支援を継続しておこなった。そのうち、ロータート郡のジュダ統合教育校においては、現在使用している寄宿舎の生活環境が劣悪で、盲児童の健康状態にも悪影響を及ぼしているため、本年度、新寄宿舎の建設に着手した。
- ②NAWBにて、統合教育担当教師研修を実施。参加した教師は点字に関する知識、歩行・日常生活訓練の理論、特殊レクリエーションについて学んだ。(1998年4月28日～6月9日)

## 4. 眼科診療と失明予防

- ①バラCBRセンター併設の眼科診療所において、バラ郡の眼疾患患者7,214名が診療を受けた。その結果、手

術の必要があると診断された患者に対しては、アイ・キャンプと隣郡の眼科病院での手術を斡旋した。当診療所の存在は、眼科病院がないために眼疾に罹患しても適切な治療を受けることが困難であった同郡住民の失明予防に大きく貢献している。

- ②バラCBRセンターにおいて、地域住民を対象にした「失明防止講習会」を開催。医師が、失明予防や眼病症状に関する講義をおこなった。(1999年2月2日)バラCBRスタッフがバラ郡内の学校や村落を巡回して、眼科検診を実施。計959名の児童・住民が受診した。同時に、講習会を催し、ビタミンA摂取の重要性など失明予防に必要な栄養知識や公衆衛生知識の普及を図った。

## 5. 技術指導と事業管理

当協会点字出版局の技術スタッフをNAWB点字出版所に派遣し、点字教科書製作に関する技術指導を実施。また、海外事務局スタッフをNAWB本部をはじめとする事業実施地域に派遣し、事業管理にあたらせた。

- ①1998年5月24日～5月31日

技術スタッフ1名 事務局スタッフ1名

- ②1998年11月25日～12月6日(技術スタッフは29日から)

技術スタッフ1名 事務局スタッフ1名

- ③1999年2月28日～3月10日

技術スタッフ1名 事務局スタッフ1名

## 6. 塩化ビニール板の輸送

笹川平和財団からの助成を受け、点字教科書の原版となる塩化ビニール板1万枚をNAWBに輸送した。

## 7. 広報・イベント・募金活動

- ①1998年9月「愛の光通信」第13号を発行して広報・募金活動をおこなった。
- ②1998年10月3日・4日、日比谷公園で開催された「国際協力フェスティバル」に参加。ネパールにおける活動をアピールした。
- ③1998年11月29日～12月6日の日程でネパール・スタディツアーを実施。統合教育校やNAWBを訪問し、学校関係者やNAWBスタッフとの交流がおこなわれた。
- ④1998年12月4日・5日、音読公演「ガラスのうさぎ」を後援。売り上げの一部が海外事業に寄付された。

自 1998年 4 月 1 日  
至 1999年 3 月 31 日

## 1998年度収支計算書

| 借 方       |             | 貸 方       |            |
|-----------|-------------|-----------|------------|
| 科 目       | 金 額         | 科 目       | 金 額        |
| 事 務 費     | 1,172,605   | 寄 付 金 収 入 | 10,594,329 |
| 賃 料       | 360,000     | 協 賛 金 収 入 | 273,000    |
| 旅 費       | 5,840       | 助 成 金 収 入 | 7,657,472  |
| 消 耗 品     | 27,625      | 募 金 収 入   | 2,575,917  |
| 印 刷 製 本 費 | 201,600     |           |            |
| 役 務 費     | 492,134     | 事 業 収 入   | 303,280    |
| 原 稿 料 費   | 25,000      | 販 売 収 入   | 303,280    |
| 雑 費       | 60,406      |           |            |
| 事 業 費     | 11,026,640  | 雑 収 入     | 17,429     |
| 海 外 出 張 費 | 1,694,230   | 雑 収 入     | 17,429     |
| 海 外 援 助 費 | 9,244,245   |           |            |
| 雑 費       | 88,165      |           |            |
| 小 計       | 12,199,245  | 合 計       | 10,827,098 |
| 当 期 繰 越 金 | △ 1,372,147 |           |            |
| 合 計       | 10,827,098  |           |            |

## 貸借対照表

1999年 3 月 31 日現在

| 借 方     |           | 貸 方       |             |
|---------|-----------|-----------|-------------|
| 科 目     | 金 額       | 科 目       | 金 額         |
| 流 動 資 産 | 9,881,102 | 繰 越 金     | 9,881,102   |
| 現 金     | 22,479    | 前 期 繰 越 金 | 11,253,249  |
| 預 金     | 9,858,623 | 当 期 繰 越 金 | △ 1,372,147 |
| 資 産 合 計 | 9,881,102 | 純 財 産 合 計 | 9,881,102   |

## 海外援護事業記録

(1998 / 6 - 1999 / 5)

98年 6 月 \*国際ボランティア貯金配分金決定 (6/22)

9 月 \*「愛の光通信 No.13」発行

10 月 \*日比谷公園で開催された「国際協力フェスティバル」に参加 (10/3,4)

11 月 \* (社) 日本ネパール協会主催のコイララ首相来日歓迎会に出席：井口 (11/5)

\*コイララ首相に随行した NAWB 理事シュレッサ氏が当協会を訪問 (11/10)

\*現地における技術指導・事業管理：佐藤、根本 (11/25-12/6)

\*ネパール・スタディツアー (11/29-12/6)

12 月 \*T O K Y O F M ホールで開催された音読公演 (12/5,6)

\*笹川平和財団の助成により、点字教科書製作用塩化ビニール板 1 万枚を NAWB に輸送 (12/10)

99年 2 月 \*現地における技術指導・事業管理：佐藤、根本 (2/28-3/10)

4 月 \*事務局長の人事異動 (4/1)

5 月 \*現地における技術指導・事業管理：竹内、根本 (5/20-5/30)

\*香港製点字器350組を NAWB に輸送 (5/21)

寄付者ご芳名 (五十音順・敬称略) 1998年7月1日ー1999年6月30日

温かいご支援ありがとうございました

(個人)

|          |         |          |        |        |        |
|----------|---------|----------|--------|--------|--------|
| 青木 ヒサ    | 青山 マリ子  | 秋元 武雄    | 秋山 俱子  | 浅野 孝一  | 浅田 清香  |
| 阿部 和行    | 阿部 淳    | 荒木 薫     | 荒木 幸子  | 在田 一則  | 有本 成子  |
| 安藤 生     | 井口 立己   | イクバル サヒラ | 石井 桂   | 石井 浩介  | 石川 はな  |
| 石川 尚代    | 石川 昌宏   | 石田 隆雄    | 石原 幸栄  | 石光 貞子  | 市角 誠   |
| 市原 政春    | 出田 敦子   | 出光 永     | 伊藤 啓子  | 今泉 新治  | 井村 恵津子 |
| 入江 一恵    | 植竹 清孝   | 上野 伊律子   | 上村 香代子 | 上村 健次  | 牛若 寛治  |
| 内田 和子    | 内山 武志   | 榎本 サダ子   | 遠藤 利三  | 大岡 信   | 大河原 正子 |
| 太田 義秋    | 大橋 東洋彦  | 大橋 義男    | 小笠原 弘子 | 岡田 伸一  | 尾形 雅子  |
| 岡野 マスミ   | オギノ 芳信  | 小河 静     | 小沢 隆   | 尾関 育三  | 小田 淳   |
| 小野 日央    | 小幡 欣治   | 折戸 正明    | 貝元 利江  | 加来 典子  | 加治 甚吾  |
| 鹿島 和子    | 片桐 武昭   | 片山 文彦    | 加藤 晃   | 加藤 万利子 | 金森 なを  |
| 金子 照子    | 金田 一郎   | 神谷 辰夫    | 神山 貞子  | 菊井 明子  | 木塚 泰弘  |
| 栗本 久夫    | 小泉 周二   | 小泉 信治    | 小出 隆家  | 小島 和雄  | 小島 喜代美 |
| 後藤 尚子    | 後藤 良一   | 小長谷 正夫   | 小林 一弘  | 肥塚 隆   | 肥塚 美和子 |
| 森 愛子     | 近藤 公瑞   | 紺野 敏雄    | 三枝 礼子  | 斎藤 惇生  | 坂入 操   |
| 佐古井 貞行   | 佐々木 三郎  | 佐藤 謙次郎   | 佐藤 利村  | 佐藤 久夫  | 四方 幸枝  |
| 篠原 信子    | 柴田 光俊   | 島倉 忠行    | 清水 はつ  | 下沢 仁   | 白井 雅人  |
| 末吉 恵里    | 杉沢 宏    | 鈴木 雅夫    | 高橋 早苗  | 竹村 実   | 田中 さ加恵 |
| 田中 茂     | 田中 徹二   | 田中 正和    | 田中 亮治  | 谷内 正史  | 俵 秀明   |
| 椿 久美子    | 坪川 靖彦   | 寺島 アキ子   | 照井 博   | 当津 順子  | 当山 啓   |
| 時任 基清/清子 | 鳥羽田 節   | 鳥海 宜和    | 鳥山 由子  | 中川 みどり | 中島 章   |
| 永田 三郎    | 永野 耐造   | 中村 保信    | 成田 稔   | 南林 和   | 西條 一止  |
| 布山 喜章    | 野田 寛    | 橋本 時代    | 長谷川 一郎 | 花田 重信  | 八田 公雄  |
| 林 大      | 原田 美男   | 檜山 寿子    | 松山 美代子 | 平田 米太郎 | 平塚 尚一  |
| 福原 ササノ   | 藤井 泉/悦子 | 藤江 幾太郎   | 星野 彰   | 本間 一夫  | 増野 幸子  |
| 町田 英一    | 松尾 宏之   | 松岡 義人    | 松下 信雄  | 丸山 雄一郎 | 水野 まち子 |
| 永岡 保実    | 南 英治    | 三原 富美子   | 宮崎 勇   | 宮下 秀列  | 宮原 満子男 |
| 目黒 千代子   | 森 典子    | 両角 征吾    | 山内 光則  | 山口 節子  | 山崎 邦夫  |
| 山田 あき子   | 山田 せつ子  | 山田 元子    | 山辻 英也  | 山根 昭市  | 山本 景子  |
| 山本 強利    | 湯浅 寛    | 横山 章     | 吉田 旬   | 吉野 由美子 | 吉村 弘子  |
| 米田 昌徳    | 渡辺 直明   | 渡辺 勇喜三   | 若林 弘子  |        |        |

(団体)

|                         |           |             |             |
|-------------------------|-----------|-------------|-------------|
| (株)アワーズ                 | エアメールサービス | (有)大本印刷     | 岐阜盲学校高等部生徒会 |
| 国立身体障害者リハビリテーションセンター学友会 |           | 庄や国分寺店      | (株)高垣商店     |
| (株)仲村点字器製作所             | (有)間宮製作所  | 宮古南静園視覚障害者会 | 高松キワニスクラブ   |
|                         |           |             | 武蔵野女子学院生徒会  |

(お詫び)

当方の手違いにより、ご寄付を賜りながら、次の方々ならびに団体のお名前が前号に掲載されませんでした。ここに追記してお詫び申し上げます。(敬称略)

|             |            |            |             |           |       |       |
|-------------|------------|------------|-------------|-----------|-------|-------|
| イクバル ハニフ    | 池田 義明      | 池本 亘子      | 石川 芳秀       | 和泉 雅子     | 伊藤 啓子 | 内山 武志 |
| 大橋 義男       | 金杉 克之      | 小森 愛子      | 沢崎 喜一郎      | 野々山 宏     | 藤井 清光 | 堀川 博司 |
| 村上 徹        | 山口 和子      | 山口 節子      | 山崎 邦夫       | エアメールサービス |       |       |
| 岐阜盲学校高等部生徒会 | (財)戸山サンライズ | 福島県視力障害者協会 | 宮古南静園視覚障害者会 |           |       |       |

# ◆CONTENTS◆

- ・心揺さぶられた初めての現地視察  
海外盲人交流事業事務局  
竹内 恒之……………2
- ・事務局人事異動と名称変更のお知らせ……………5
- ・塩化ビニール板の輸送……………5
- ・ついに完成 ジュダ校新寄宿舍……………6
- ・研究テーマは国際協力  
東海市立平洲中学校……………7
- ・ネパール・スタディツアーの思い出……………8
- ・現地から届いた手紙……………10
- ・音読公演「ガラスのうさぎ」……………11
- ・98年度事業報告(英文)……………12
- ・98年度事業報告(和文)……………13
- ・98年度収支計算書、  
海外援護事業記録……………14
- ・寄付者ご芳名……………15

東京ヘレン・ケラー協会  
オリジナル・テレホンカード  
頒価：2,000円（2枚セット）



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインしたオリジナル・テレホンカードの2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。なお、本テレホンカードの純益はすべてネパールの盲人援護に使われます。

## 募金をお願い

ネパールにおける失明防止と視覚障害者援護をさらに充実するために、募金をお願い致します。  
寄付金のご送金は、下記口座をご利用下さい。

郵便振替：00150-5-91688

銀行口座：さくら銀行新宿支店（普）5101190

## 寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第217条第1項第5号および、法人税法施行令第77条第1項第5号にかかげる社会福祉法人でありますので、当協会に対するご寄付は、所得税法第78条第2項第3号、法人税法第37条第3項第3号の規定が適用され、税法上の特典が受けられます。

## 編集後記

本号の中で、事務局の人事と名称の変更についてお知らせいたしました。新体制の下、事業は順調(?)に推移しています。一方、今年も順調とはいかなかったこの編集作業が私の事務局における最後の仕事となりました。

この3年弱の間に8回ネパールを訪れました。真っ先に神々しい山々がイメージされる国ですが、私たちが赴くのは田園地帯がほとんど。景勝地ボカラなどには1度も行く機会がなく、仕事とはいえ、周囲から同情されています。

それはともかく、この仕事を通して何にも代え難い貴重な経験をしました。全てが忘れられない思い出です。これも皆様の事業へのご支援のお陰で、担当者として体験できたことであり、衷心からお礼申し上げる次第です。(A. N)



**TOKYO HELEN KELLER  
ASSOCIATION**

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072, Japan

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会

海外盲人交流事業事務局

住所：〒169-0072 東京都新宿区大久保3-14-4

TEL：03-3200-1310 FAX：03-3200-2582

E-mail：XLY06755@nifty.ne.jp